
貴方を...

銀 楠木

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方を…

【Nコード】

N6523A

【作者名】

銀 楠木

【あらすじ】

俺たちは付き合い始めた。幸せなときを過ごしていた。幸せなときは、終わりを告げた。

（前書き）

はじめまして。 銀 楠木と申します。 なにぶん、初投稿なもので拙
いにもほどがあるかも知れませんが、出来れば覗いていつてくださ
い。

『貴方を好きです』

そう言つてのけた俺 片桐 伶 の目の前にいる少女の笑顔は朱に染まっていた。

「…は？」

なんだということだこれは夢か違う現実だ残念いやそうなのか？
つてちよつと待て俺。余りの状況に脳内でカオスが出来てるじゃないか。

「どうしたの？」

「いや…」

不思議そうにする少女 友人の兵藤詩歩に返事をした俺は冷静に経緯を思いだしはじめた。

そう、昼休みに買い物に誘われたんだ。それから放課後になり約束通り服やアクセを見て回った。

空が赤くなりはじめてから買い物を終えて二人で帰り道を歩いていた。

そして、公園に寄り道したら今のセリフ。

「つまり…告白か！？」

「今更気付いたの…？」

確かに今更だが。

「どうして？」

俺としては当然の疑問が口から漏れ出す。

「好きになったから。好きと言う感情に理由は要らないと思うの。それでも強いて言うなら

貴方という存在総てに私という存在総てが惹かれたからよ」

難しい事を言ってくれる。だが、不思議と俺はこの、今まで幼馴染みでしかなかった少女

に特殊な感情を抱いているのだと気付いた。

「俺も、詩歩が嫌いじゃないと思う」

「本当に？」

「本当だ」

すっかり頷くと、詩歩は心から嬉しそうに。緊張という拘束から解かれ本物の笑顔を生んで。

「なら、私は貴方を愛します…」
と呟い声は。

俺の耳には届かなかった。

それから俺たちは大半の時間を共に過ごした。
朝。

「おはよう」

「悪い、待たした」

微笑と共に出される彼女の手を握り歩き出す。
昼。

「飯食いに行くか？」

「私はお弁当あるけど…伶はお昼抜いたら倒れるんじゃない？」

「確かに…」

俺は苦笑し、詩歩は呆れた顔しながら教室を後にする。
夜。

「今日はどうする？」

「もう遅いから今日は帰るわ」「わかった」

二人で名残惜しそうに闇色の帳を歩き始めた。

俺の一日は詩歩の一日。

詩歩の一日は俺の一日。

これだけ一緒にいれば仲のいい友人。特に幼稚園以来の親友、十賀純也などはここぞとばかりにからかってくる。

だがそれでも本気でそう信じる事が出来る日々は、俺の人生で一番

幸せだった。

そう信じる事が続いたならば、幸せだった。

共にいる時間の中で、明らかに詩歩は憔悴していた。

「最近カバンの整理してるの？」

膨れてるカバンを見て溜め息を漏らされる。

「ん…ああ…今日するよ」

歯切れの悪い答えの後に一瞬の沈黙。

「最近何かあったのか？」

その間を借りて、気付いてから数週間して、ようやく俺は話を切り出す事に成功。

「ううん、別に」

「嘘吐くなよ」

俺への気遣いだろうが、それは俺にとって愛情だけでなく哀情まで生み出されたただけだ。

「わかった。でも…少し待って」

「どうして？」

この台詞を、俺はすぐに後悔してしまった。

なぜ、そんな顔をするんだろう。

些細だが、確実にやつれた顔で。

笑みを作るのに失敗した、寂しく儂い微笑で。

「貴方を愛してるから」

三文役者のような台詞を呟いた。

その聞いたこっちが照れるような言葉は、初めて確かに俺に届いていた。

そして

翌日、俺は悪夢を見た。

たくさんの友人からかかって来る電話。

全てが詩歩の死を告げるもので。

通夜、葬式、告別式の日時を伝えられ。

黒い礼服を着た俺は虚ろな視線と引き連れた虚無と共に線香を上げ手を合わせた。

涙は流さず。

嗚咽は零さず。

全てを閉ざして。

ただただ現実を悪夢に置き換え続けていた。

全ての現実を否定するようにして。

起きてはすぐに眠りにつく生活を繰り返している。

もう、いいだろう。

俺は生きる意味を失ったのだから。

朝も。

昼も。

夜も。

俺が詩歩の声を聞くことは出来なくなったのだから。

全てを許容する微笑も。

呆れるような苦笑も。

名残惜しそうな横顔も。

俺は見る事が出来ないのだから。

全てを捨てたくなった。

捨てようとした。

俺の鞆からはみ出た、一枚の紙片を見るまでは。

愛らしい犬の絵がプリントされたメモ帳は何度も見たことのある、詩歩の所有物。

それは、俺への手紙。

俺はそれを読んで、世界に未練ができた。

遊具と言えばブランコしかない寂れた公園で俺は立っていた。外に出たのは何日ぶりだろうか？

いや、そんなことに意味はない。詩歩を失った世界は俺にとって一瞬足りとも進みはしないのだから。

「…何の用だ？急に呼び出したりして」

入口から聞こえる友人の声。

「純也」

親友は心底不思議そうな声で尋ねてきた。俺は純也に近付き詩歩の手紙を見せる。

それを携帯で照らしながら読み進める顔が徐々に青ざめてきた。

詩歩の手紙には、こう書いてあったからだ。

『ごめんなさい。口ではどうしても言えなかったの。私は今、ストーカーの被害にあっています。』

誰が私を付け回しているか、最初は分からなかった。そして、わかった時には遅すぎたの。

これを書く二日前、私は十賀君に襲われ、汚れました。それから、昨日も。今日も。

本当は、何も言いたくなかったけど　あなたはいつか気付く　ったから。

だから　紙にしま　。私は　れてしまったけど　これだけは信じて？

私は貴方を　ています』

最後の方はところどころ涙で掠れて読めなくなってしまうている。それでも、十分だろう。

「…呼び出した理由は分かったか？」

返答を待つつもりは既に無かった。聞くだけ聞いて隠していた包丁を取り出す。

「俺を…殺すのかよ？」

「ああ」

何の躊躇もなく兇刃を振るう。生憎と純也の服しか斬れずに終わっ

たが。

「馬鹿かお前？あの女は自殺したんだぞ？俺は直接関係ないじゃねえか！」

「犯つたのは認めるんだな？」

馬鹿は、お前だよ。純也…

「別に、自殺とか他殺とかはどうでもいいんだ」
本当に。

どっちだろうと大差ない。

「重要なのはな…お前が俺から詩歩を消したって事なんだよっ…」
柔らかい部分と硬い部分をまとめて貫いた感覚が手にある神経を走り抜ける。続いて、ごりっ

という硬すぎる感覚。

最後にまだ暖かい液体を全身で感じた。

呆気なさすぎる、復習の終わり。

そして、俺の終わり。

「これで、本当に未練は無いな…」

この現実で、もうすべき事は何も無くなった。

終わってしまったていた人生の本当の終焉。

「ああ、そうか。そうだったんだ。」

純也を殺すことに意味は無い。分かりきってはいたことだが、やはり俺の生きる意味になっていたんだ。

証拠に、今俺の中にあるのは大きな闇だけのようだ。

希望とか、そういうプラスの要素が一切無い、ただの闇。

だが、代わりというわけでは無いが、俺は別件でやらなくてはいけないことを思い出しもした。

「詩歩に会わなきゃな…」

呟きにあわせるようにゆっくりと自分の腹部に刃を通す。
ぷっつ

という皮の裂ける音の後、吐き気のするほどの熱さが全身を駆け巡っていく。

「……俺、まだ…詩歩に言っ てなかつ たん…だよな」

もし死後の世界が存在するなら。

もしあなたとともにそこに在れるなら。

一言だけ、一言だけでいいから伝えたい。

…
…
…
俺は貴方を愛しています

（後書き）

いかがでしたでしょうか？自分としてはもつと長文に出来たと思います反省しているのですが…ご感想、ご意見などがありましたら、伝えていただけると泣いて喜びますのでお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6523a/>

貴方を...

2010年12月18日19時55分発行